

介護老人保健施設ライフサポートねりま

症例概要 利用者: 50歳代後半 女性 要介護4

病名: 廃用症候群、特発性間質性肺炎

利用サービス: 入所

経過:

左視床出血により右片麻痺、高次脳機能障害、失語症が出現。回復期リハビリテーション目的で当施設回復期病棟へ入院。経過中に特発性間質性肺炎を発症。廃用症候群の診断を受けて再入院となった。車いす介助ベースで基本動作軽介助レベルを達成し、コミュニケーションは2語文程度の発話が可能となった。ご家族より、更なるADL動作向上に向けたリハビリの継続の希望により老健入所となった。

内容

左視床出血により、右片麻痺・高次脳機能障害・失語症を認め、当施設回復期病棟へ入院されました。入院経過の中で特発性間質性肺炎を発症して一度転院をし、廃用症候群として再度入院されました。

入所当初、コミュニケーションはクローズドクエスションで7割程度のやり取りが可能なレベルだった。基本動作は全般軽介助レベルで立位・歩行は短下肢装具を装着して中等度介助にて可能だった。ADLでは車いす介助の設定としていた。また発動性がほとんどみられず、トイレや食事の誘導はスタッフからの声掛けが必要だった。レクリエーションへの参加や他利用者さんとの交流もほとんど認めなかった。

多職種で意見交換し、ご本人の会話場面と感情を引き出す場面をなるべく増やし、ご自身から自発的にアクションを起こしやすい環境・雰囲気作りを進めていくように関わる方針とした。病棟生活を過ごせることと身の回りADL動作の介助量軽減のため身体機能の向上を目的にリハビリでは長下肢装具での歩行訓練を積極的に実施して立位・歩行の獲得を目指した。

棟内での棟内生活におけるご本人の取り組みとしてベランダガーデンにてチューリップの栽培を実施した。また日々のレクリエーションへの参加を積極的に促したり、他利用者さんを交えての会話場面を設けるように意識した。

現在は、屋内移動四点杖+短下肢装具にて近位見守りレベルを達成した。日常でもADL上では失禁認める場面はあるが、自己申告してくれる場面が出てきたりと、自発性を認め始めた。コミュニケーションではリハビリ場面に「あー、疲れた。でも頑張らないとね。家ね。大変だもんね。」とポジティブな発語

が聞かれるようになった。日常生活でも全体的に発話場面が多くなり、普段の離床場面でも他利用者様と談笑される場面等、明るい表情・会話の場面が見違えるほど増えた。ガーデンでのチューリップ栽培では水やりをする中で笑顔場面が増えた。

多職種連携で、ご利用者の機能に合わせた“できる”を見つけていく関わりをすることで“できる”が増え、笑顔あふれる日常へとつながった。